

地域づくりシンポジウム

女性の力が地域を変える



「女性の視点－生活者の視点を地域づくりに活かす」をテーマにした地域づくりシンポジウム（庄原市自治振興区連合協議会、庄原市主催）が12月15日、庄原市ふれあいセンターで開催されました。

NPO法人コミュニティサポートセンター神戸の中村順子さんによる基調講演に続き、市内で活躍している女性がパネル討論を展開。会場には約80人の参加者が集まり、熱心に聞き入りました。

基調講演 女性が元気は地域が元気 ～生活者の視点で地域を見つめてみよう～

元気な高齢者は多い

平成17年の国勢調査によると、庄原市の高齢者は約15,600人。15%の要介護者と20%の要生活支援者な高齢者がいることとなる。

そのうち女性は5,500人。まず、この1割を地域活動に加わってもらおう。目標を持ってどうだろうか。550人の元気な女性ができれば、まちは劇的に変わる。

高齢者は単に社会サービスの受け手というわけではない。何歳になっても元気であれば、地域の仕事がいくつもできる。また、65歳以上の年代層が自分の時間を一番持っている。この年代が地域でがんばっている。

か、元気であるかがまちづくりのポイントになってくる。

震災をきっかけに地域活動

阪神・淡路大震災で、仲間を亡くし、地域社会が完全に崩壊した時、地域の安全・安心があつて初めて自分の生活の平和があると感じた。

震災をきっかけに、「月に1回でいいから地域のことをしませんか」と呼びかけ、ボランティアグループ「東灘・地域助け合いネットワーク」を設立した。これを母体に平成8年、「NPO法人コミュニティサポートセンター神戸」（以下CS神戸）を設立し、配食サービスなど、地域課題を解決する団体の立ち上げ

や運営支援を行っている。

支援団体には多くの女性のリーダーがいる。CS神戸も20代から60代まで、男女がバランスよく約40人が働いている。会社は同質の人を揃えて、同一のサービスを提供しているが、NPO法人では多様な人間が集まることによって、地域のいろんな要望に応えることができる。

住民の助け合いで住み良いまちに

人は皆、他人に誇れる趣味を一つや二つ持っている。それを自分だけのものにして、少し社会に開いてみませんか、わたしたち

は呼びかけている。他人よりちょっと上手な人を集めること、同じまちの住民が講師になることで、いろんな講座が安くてできる。趣味を少し社会化するだけで、人の集まりができる。こうして人と人をつなぎ、仲間づくりのお手伝いをしていく。介護保険が2000年からスタートし、2006年に大幅な改定があった。これからは、家事は介護保険の適用外になる。しかし、家事のサービスを必要とする要介護者は、庄原市でも約3千人いると思われる。それを誰がやるのか、市民ボランティアをはじめ65歳以上でいろんな経験や能力

各団体が得意分野を生かす

庄原市には、NPO法人が少ないと聞いているが、地域活動は自治会や自治振興区だけでなく、NPO法人を含めてそれぞれの団体が得意分野を活かしてほしい。活動のエリア、種類によって、どの団体が適しているかが異なってくる。地縁系の自治会・自治振興区と、地域を越えたテーマ系のNPO法人、そして行政の基盤づくりが手を結べば、すごい地域ができる。

計画や組織づくりから始めない

どこのまちにも課題が山積している。まず、地域の課題は何かを調べることから始めよう。私たちは、地域課題に対して何かできることはないか、住民の不安

を一つでも取り除きたい、不便なことを便利にしたい、このような思いから活動を始めている。

大事なのは、いきなり計画づくりから始めないこと。二つ目は最低3人の仲間をつくること。三つ目は組織を先につくること。庄原市にはNPO法人が少ないからNPO法人をつくるうではなくて、組織づくりは後から。自分たちがやっている活動の身の丈に合った組織をつくる。男性が集まると、すぐ組織をつくり、その後何をしようかと事業計画を考えることが多い。そうなる、活動をする前に組織の重さに負けて失敗する。サークルから、試行的に活動をして、組織をつくらう。四つ目は利用者の評価を受けること。サービスを提供している相手の気持ちを知ること、次の目標が見えてくる。

女性は気付きのセンサー

女性は、地域活動がしやすい。それは、いつも「生活者の視点」を持っている

から。衣・食・住をはじめ、子どもの教育のこと、近所付き合いのこと、地域や社会活動のこと、いろんな場面でネットワークを持っている。感じる力が非常に高く、自分も困った経験が多いから、他人の困りごとにも自分のことのように感じる。女性は丸ごと気付きのセンサー。多くの女性が地域活動に参加して、みんなが元気になる地域をつくってほしい。

●地域活動の留意点

- ・ 困りごとがオープンに出来る雰囲気をつくる。
- ・ 楽しく、無理せず、できない人を排除しない。
- ・ サービスの双方向性で利用者にもできることはしてもらう。
- ・ 利用者に心理的負担をかけない。
- ・ プライバシーに踏み込みすぎない。
- ・ すべて小地区での解決ではなく、サービス内容により地域エリアを使い分ける。
- ・ 夢・課題→仲間→企画→試行→計画→組織→活動→評価のサイクルで地域活動に取り組む。



NPO法人「コミュニティサポートセンター神戸」理事長 中村順子さん

兵庫県生まれ。阪神・淡路大震災がきっかけで、1996年に現在の組織を立ち上げる。女性が代表のNPO法人の草分け的存在である。女性の生活に根ざした視点や感性、何事にもとられない柔軟な発想、即断実行力を、これからの「地域コミュニティづくり」を形成する重要なポイントとし、「共生循環型のまちづくり」を形成するための事業を推し進めている。

コメンテーター



にいりえ 二井理江さん

中国新聞社三次支局 記者

1994年、中国新聞社入社。徳山支局や経済部などを経て、2005年3月から三次支局へ勤務。「協働のまちづくり」や「ルポ集落」、過疎地域でのいとなみを取り上げた「山峡の四季」など、数多くの記事を連載。地域のおばあちゃんたちの活躍を全国に発信している。



なかむらじゅんこ 中村順子さん

NPO法人コミュニティサポートセンター神戸 理事長

コーディネーター



ひらきひさえ 平木久恵さん

(有)グリーンブリーズ 代表取締役

1991年から9年間社外記者として中国新聞の「女のページ」を担当。2000年、企画編集グループ「グリーンブリーズ」を設立。広報紙やポスター、チラシなどを企画制作している。また、ワークショップのファシリテーターとして、数々の地域づくりや町おこしに関わる。「話していると楽しくなる」その人柄で、女性の感性を引き出す。

◎パネルディスカッション

わたしたちの地域づくり

～活動を通じて見えるもの～

を持って生まれた男性と女性で地域活動を展開していくわけですが、最初に物事を発見・発想する、課題を自分のことのように思う、という能力は女性が長けています。しかし、それを解決するためにグループをつくって組織的な活動をしようとする男性の論理志向が能力を発揮してきます。ですから、両者の弱み・強みが上手く合わさった組織ができれば、地域活動がとつ

ても面白いものになります。地域と行政が手をとりあつて

道下 自治振興区は、数信自治振興区のように基盤がきちんとしてあり、若い人が多いところもあり、高齢者が多いところもあり、これから益々地域の格差は広がっていくと思います。そのため、市の職員による自治振興区応援隊など、職員の方々

中村 結論的に言いますと、手を上げた人が活動できるような仕組みを持つことだと思います。兵庫県に1、200位あるNPO法人の3分の1は女性リーダーです。この人たちは、それぞれの生活の中から手を上げて生まれてきた組織です。庄原市の自治振興区は88あ

人もいません。地域団体・地縁団体のほとんどは、男性が役職を占めていて、そういう会に招かれて行っても、女性はお茶酌みや、台所と座布団の片付けばかりしています。こうした様子が意志決定の場に女性が出て来られないという弱さを象徴的に表わしています。女性部を作ったり、役員に無理やり女性を入れたりする方法もあるかもしれませんが、もう一つの軸を作っていくほうが、地域づくりとしてはもっと面白くなると思います。このように手を上げてくる女性をどれだけつくっていくのか、また、さまざまな支援施策で誘発していくなどして、別軸をつくっていくか、既存の組織を変えていくか、あるいは、女性の活躍の場を広げるのは難しいと思います。

女性の力を生かした地域活動を実践

パネリスト



まつなが ゆりこ 松長百合子さん

比和町在宅介護者の会「むつみ会」会長

比和町在住。一人で死んでいく高齢者を無くしたい。その人たちを守るには、遠い親戚より、離れて暮らしている家族より、ずっと昔から同じ地域に住んでいる私たちだと感じています。介護する人、される人が共に暮らせる社会を目指して活動を続けています。



ふじわら すずこ 藤原鈴子さん

数信自治振興区 事務局長

一本町在住。自治振興区の拠点である自治振興センター（旧公民館）には、皆さんがアイデアをたくさん持って来られます。みんなで話し合えば、これまで見えなかったものが見えてきて、夢が広がり、私の心もどんどん豊かになっていきます。チームワークを大切に、皆さんに助けられ、楽しんで仕事をしています。



みちした かずこ 道下和子さん

酪農家、庄原市農業委員

口和町在住。地域の農業を守っていくこと。それは、農業に興味を持ち、地場産のお米や野菜を美味しいと感じてくれる「農業ファン」を増やすことだと思います。そして、その農業ファンが地域にも根付いてくれるよう、地域全体でバックアップできたらいいですね。「和顔愛語」をモットーに小さな幸せを求めて暮らしています。

平木 実践されている活動を紹介してください。

松長 母親を約14年間介護した経験から、「在宅介護者の会」を広島県で最初に設立しました。比和町へUターン後、比和町でも「在宅介護者の会」を立ち上げ、現在、介護者のOBを含めて55人の会員がいます。各地域でサロンの開催や、一人暮らし高齢者の見守り、

介護者のリフレッシュ活動などを行っています。

藤原 平成元年から公民館の自主運営に携わっています。平成19年度から庄原地区の公民館が自治振興センターに移行され、地域の皆さんから「わしらが何でもバックアップするから、事務局長をしてくれ」と、心強い言葉をいただき、数信自治振興センターの事務局長に就任しました。自治振興センターは、これまで別組織であった自治振興区・公民館・社会福祉協議会・体育協会などの事務局を一本化することにより、運営もスムーズになり、区民の参加も増えました。自治振興区活動の拠点である自治振興センターは、区民のオアシスとして、皆さんが気兼ねなく自分の思いを伝え、交流できる場所になりたいと

道下 全国の農業委員38、752人のうち、女性は1、686人しかいません。庄原市の農業委員は43人中3人が女性です。農業の社会はまだまだ男性社会と言っても過言ではないと思いま

す。農業を昔から支えてきたのは男性も女性も一緒だと思えますが、家族協定を結び、給料をもらえている女性がどれくらいいるのでしょうか。中には、農業所得の名義は夫だが、実質は奥さんが握っているという家庭も多いと思います。けれども、「長年耕してきた農地が、夫が亡くなったとたん、息子や夫の兄弟の名義になってしまい、自分が長年耕してきた農地だけ耕作意欲が無くなってしまつた」と言う女性もたくさんいます。農業委員会で、

「わたしたち3人で女性部を作りたい」と提案したところ、会長をはじめ委員の皆さんが、「それは良いことだ。これまで届かなかつた女性の思いをしっかりと届けてください」と言っていたとき、わたしたちの大きな励みとなりました。

男女の特性を地域づくりに生かす

平木 3人とも発想する力がすばらしいですが、それを人に伝える力もすごいですね。よく、女性のストレス解消は、しゃべる・食べる・買うと言いますが、しゃべることによって賛同者が増えてくるということですね。

二井 これは私の知り合いの方から聞いた話ですが、男

中村 このように性の特性

には地域の現状をしっかりと見つけていただき、情報伝達や情報発信をしていただきたいと思っています。

地域づくりは二つの軸で

平木 地域には、さまざまな活動をしている人や思いを持った人がいます。その人たちを一人でも多く地域づくりの場へ参加していただくには、どうしたら良いのでしょうか。

人もいません。地域団体・地縁団体のほとんどは、男性が役職を占めていて、そういう会に招かれて行っても、女性はお茶酌みや、台所と座布団の片付けばかりしています。こうした様子が意志決定の場に女性が出て来られないという弱さを象徴的に表わしています。女性部を作ったり、役員に無理やり女性を入れたりする方法もあるかもしれませんが、もう一つの軸を作っていくほうが、地域づくりとしてはもっと面白くなると思います。このように手を上げてくる女性をどれだけつくっていくのか、また、さまざまな支援施策で誘発していくなどして、別軸をつくっていくか、既存の組織を変えていくか、あるいは、女性の活躍の場を広げるのは難しいと思います。